

優秀賞

「夏休みにぼくは、車いすを体験した」

登米市立米谷小学校 四年 鈴木 風雅すずき ふうが

ママがギックリごになつた。家の中ではゆっくり歩いていたママ。

買い物に行つたとき、お店で長時間は歩きまわれないと言つたので、ぼくと高校生のお姉ちゃんで交代して、ママを車いすに乗せて、お店の中をまわつた。お姉ちゃんが行きたいといふやうの服屋さんでぼくがママの車いすをおした。どんどんお姉ちゃんが好きな所へ勝手に行つた。ぼくはママが乗つている車いすが重くて自由に動けない。ママを乗せた車いすをいきおいあまつて商品だなにぶつけたり、行きたい場所の通路が商品でせまく、車いすが通れなかつた場所があつて、何回か行つたり来たりした。自由に歩ける人はここを通ればすぐなのに遠まわりしないといけない。初めて車いすをおしておもしろかつたのに、

「めんどくさい。」

「もういやだ。」

「次はやりたくない。」

「重い。」

心の中で思つた。いや声にだしたかもしね。突然ぼくが

方向をかえ、
「えつ。」

とママがおどろいた。ああそつか、声をかければいいかもしない。

「まがるよ。」

「行くよ。」

何回かおすうちに上手にできるようになつた。

会計をする時、車いすに乗つているママがバッグからさいふを出したが服屋さんのレジには高くて届かない。ぼくが横に行きママのかわりに店員さんとやり取りをした。

手をのばしてもとどかなかつた。ママも、もどかしそうにした。車いすに乗つている人もとどく机にすればいいのにと思つた。売り場ももつと品数をへらして車いすや赤ちゃんを乗せるベビーカーでもよゆうで歩けるようにすれば、みんな困らないのになあ。

ママと代わり、ぼくも車いすに乗つてみた。乗る前は乗つたことがないのでワクワクした。乗つてみると目線が低くて物が見づらく、思い通りに行かなくてむずかしかつた。周りの人じろじろ見られてちよつとはずかしかつた。一人で動く時はブレーキがそんなにきかなくて速いと、こわかつた。歩かなくても楽だと感じたけど行きたい所へすぐ行けなくて

大変だった。その時、ママが言つた。

「なんでもない時は気がつかないものだね。」

数日後、買い物にいつものようにママは歩いて行けるようになつた。車いすの置いてある所やお店で車いすを使っている人を見ると、

「こまつてないかなあ。」

と思う。はずかしくて声はかけられそうにないけど、困つている人がいたら助けられる人になりたいと感じた。